8月の行事予定
13～15日 休市　29日 正副会
26日 救命講習会

**東京都講堂（プロジェクター付120名収容）青果棟会議室（70名収容）、第一会議室（モニターTV付、30名収容）1コマ（3時間）＝5,238円で借りられます。事務局までご連絡下さい。**

組合の異動
7月末日組合員総数257社
1日　竜（加盟）
8月末日組合員総数258社（予定）

## 生食向け冷凍カツオ 美味しく安い刺身系商材需要増に期待

（8月8日水産経済新聞）

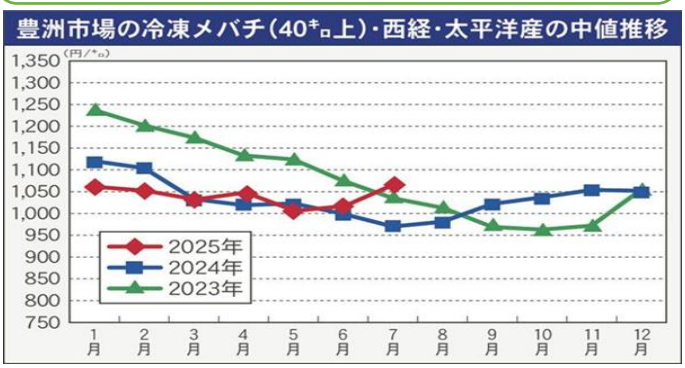
冷凍カツオ生食（タタキ、刺身、寿司種など）向けは春の一大需要期を経て、現在、製品の販売推進を図っている。今年前半の冷凍カツオ生食向け販売についてはメーカーによって違いはあるが、ある生食加工会社の担当者は７月中旬、「タタキとなるＰＳ（海まき船一級凍結）カツオが十分になかったため、各社は積極的に販売することができずにセーブして売ったかと思う。一方、遠洋竿釣りＢ１（一級凍結）カツオの供給量はそれなりにあった。そうした中で、生カツオが少ない関係もあり、冷カツオの生食向け需要は伸びていった」と話した。焼津魚市場の１～７月水揚げでは遠洋竿釣り船の南方カツオはＢ１品を主体に１万４９４トン（前年比１２％増）、キロ平均単価は３６５円（０・２％安）、東沖カツオは６５トン（９８％減）、キロ３９３円（４３・６％高）で、全漁場のカツオは１万５５９トン（１５・９％減）、キロ３６５円（６・７％高）。海外まき船の南方カツオはＢ品が２万２７４４トン（１１・５％減）、キロ２１４円（６・４％高）、ＰＳ品が７０６８トン（４５・３％減）、キロ２５２円（１４・９％安）、合計２万９８１２トン（２２・８％減）、キロ２２３円（４・２％安）。昨年は遠洋竿釣りカツオ（南方、東沖）、海まきカツオ（南方）とも水揚数量は過去５か年平均を上回った。うち、遠洋竿釣り船は６月から１１月ごろまで続いた東沖カツオ操業が好漁となって供給量が多くなるに従い相場も安くなり、ＰＳカツオも値を下げていった。それが今年に入って海まきカツオを主体に原料魚が減少し、冷カツオタタキなど製品は昨年後半ごろの安値から値を上げて７月に至っている。生食加工会社は「昨年は製品単価を下げざるを得なかった。その後（今年に入り）原料事情もあって製品売価を戻してきている。

（右欄上に続きます）

この値段をしばらく維持したい」とする。おいしく、安さが売りの冷カツオ生食製品は、スーパー・量販店などで手軽に食べられる刺身系商材として消費が増加。産地相場が最終製品値に反映されやすい商材でもある。現況、製品小売値は１００グラム当たり１００円台後半から２００円台前半が多く、これほど安い刺身系商材は多くない。生食加工会社の担当者は「資材費、光熱費や人件費などの値上がりに対し製品は少しずつ上がっている程度で、皆がんばっている」と話す。８月上旬現在、遠洋竿釣り船は東沖に近い漁場で南方カツオを好漁。今後、遠洋竿釣り船、海まき船のカツオ漁などや浜値の動向が注目される。

## マグロ冷凍商材見通し メバチ・キハダ相場上昇来るべき赤身が現地滞留

（8月8日水産経済新聞）




日本国内では現在、赤身相場が急激に上昇している。指標となる冷凍メバチのインド洋台湾船の一船買い価格（外貨）は、キロ当たり７５０円だった大バチ（４０キロ上）が２０２４年１２月末に８００円へ回復。半年後の６月中旬に８５０円へ修正されたが、１か月後には９００円へと上昇した。修正の間隔が短くなってきた背景には、台湾で昨年、大幅な減船があったことが大きい。ただ、大半が停船中の船の削減であり「実稼働船がそれほど大幅に変わったわけではない」と指摘する声もある。

（次ページ左欄上に続きます）

韓国の稼働隻数も減り、中国は国内景気の後退から出漁する船が限られてしまった。国際的に、マグロを漁獲する遠洋はえ縄船の稼働が減った影響だと考えられる。こうした理由から先行きを見通せず、上げ相場に転換。各国が日本へ輸出するタイミングを見計らうことで「来るべき赤身が現地に滞留」ということも、上げ相場に拍車を掛ける要因となった。もちろん、日本船も含めてメバチ・キハダの漁獲は続いている。年明け１～２月には、例年同様に運搬船が集中することが予想される。それまでの原料を十分に確保したうえで生産者に出漁意欲を促したい考えだ。ただし、この勢いがどこまで続くのか。「この相場でも売り続けられるか」という問題が生じる。今年に入り量販店では、特売でマグロが扱われる機会が増えている。ほかの主要商材が軒並み値上がりしている中で、数量・金額とも安定するマグロが再び脚光を浴びているのは間違いない。外貨９００円、あるいは続伸しても売れ続ければ問題ない。だが２２年の時のように相場が上がり続けた挙げ句に、量販店に愛想を尽かされることは避けたいところだ。上半期の特徴はほかに、運搬船の滞留が抑えられた点が大きい。昨年までの二の舞いにならないよう、各社がスケジューリングを徹底し、事前に冷蔵庫の庫腹の確保に努めた。運搬船を停滞させないことに、関係者が一体となって対応している。昨年は大西洋で操業する一部の日本船へ、運搬船による物資供給が遅れた。運搬船の隻数は減少が著しい。こうした事態を回避するためにも、運搬船は稼働率を上げる必要があり、港での待機日数を下げる必要がある。

**世界中で増枠の傾向　トランプ関税にも注目**　さらに太平洋クロマグロの漁獲上限は今年から、大型魚（３０キロ以上）５０％、小型魚（３０キロ未満）１０％の増枠が始まっている。１～７月に豊洲市場で上場された国産天然クロマグロは１万３４２０本で、前年の１万１６８４本から１５％の増加となった。ただし、これまでクロマグロを漁獲していなかった生産者の漁獲物も上場されるようになり、品質を疑問視する声も上がっている。

残る枠は年末に向けて消化が進む見通しで、冷凍マグロとの競合は避けられない。今年は大西洋まぐろ類保存国際委員会（ＩＣＣＡＴ）の年次会合で、大西洋クロマグロの漁獲枠に関する議論が行われる。東水域が増枠した場合は、地中海沿岸国における養殖生産量にも大きな影響が予想される。トランプ関税も重要なテーマだ。米国はメキシコからの輸入品に対する関税率を１日から３０％に引き上げると宣言していたが、その決断を９０日間延期するとしている。一方で欧州連合（ＥＵ）は１５％で合意した。米国が輸入生鮮クロマグロを、引き続きメキシコで調達するか、あるいは地中海を拡大するか。その判断次第では、既存の米国向け製品の玉突きで、日本市場に影響する可能性を否定できない。養殖物を中心とした、日本産クロマグロの中国輸出再開も同様だ。仮に禁輸措置以前の数量に戻れば、現在の供給体制が様変わりする。当面は様子見が続くだろう。

【さかなの動き】　冷凍カツオ　焼津PS相場上昇　近海振るわず引き合い　（8月8日みなと新聞）

冷凍カツオのうち、焼津漁協（静岡県焼津市）で海巻船が主に生食向けとして漁獲するブライン凍結特別選別品（ＰＳ）は８月中旬現在、４・５キロ上は前月中旬より１０円高のキロ２８０円、２・５キロ上は２０円高の３１０円、１・８キロ上は１０円高の２９０円で推移する。漁獲主体は１・８キロ前後の小型が多かったが、「沖では２・５キロ上などの割合が増えてきている」と商社。近海の生カツオが振るわないため、冷凍物の需要は強いという。商社によると、南方漁場で操業する海外巻網船は、船によって漁獲にばらつきがあるため、「明るい材料もあるが、現時点では見通しづらい」と話す。

（右欄上に続きます）

（次ページ左欄上に続きます）

末端では生食向け冷凍物の需要が高い一方、小型主体の漁獲でＰＳ原料の生産比率を増やせなかったため、産地関係者は今後の水揚げに期待する。　遠洋一本釣船は近海のビンナガ漁が終わり、南方漁場で操業しているもよう。商社は「遠洋一本釣船はコンスタントに獲れているようだ」と話す。９月にかけて焼津への水揚げも増える見込みで、商社は「ブライン凍結１級品（Ｂ１）の相場はＰＳにも影響を与える。価格動向に注視したい」と話す。

家計支出調査　６月魚介支出額１％増
マグロ、サケ量額伸長　（8月8日みなと新聞）

総務省が８日に発表した６月の家計調査によると、食料品全体の支出額は前年同月比５％増の８万９９５１円だった。魚介類全体の支出額は１％増の５６４５円と微増だった。支出額が多いマグロや生サケの量額が伸長した他、青物は全般的に好調だった。生鮮魚介の支出額は前年同月と同じで３０３３円だった。魚種ごとでは、マグロは数量が７％増、支出額は８％増の４６３円。サケは数量が７％増、支出額は８％増の４３７円。カニやタコ、エビなどの高単価の魚種の支出額は減少した。一方、青物の支出額は、イワシが２２％増、サバが１９％増、アジが６％増。支出が抑えられ、かつ健康食品としてのイメージが強い魚種が伸びたようだ。一方、カツオやブリは減少となったが、サンマは２・３倍だった。塩干魚介は１％増の１０７８円。うち、塩サケは６％増の２１６円。タラコと干しアジの金額は微増だった。刺身盛り合わせは３％増の３０９円。魚肉ねり製品は３％増の６８０円。ちくわと揚げかまぼこの金額がいずれも４％増加した。一般外食は３％増の１万４４４１円。うち、寿司への支出は８％増の１３２０円。そばやうどん、洋食などへの支出額も伸びた。

（右欄上に続きます）

魚介類以外では、コメが大幅に増え、７６％増の３３９６円。肉類は３％増の８１７５円、野菜・海藻は前年同月と同じで９３９８円。集計世帯数は７２８５世帯だった。

**全国1世帯当たり6月の品目別支出高**

| | 2025年6月 | | | 対前年比 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 支出 | 数量 | 価格 | 支出 | 数量 | 価格 |
| 魚介類 | 5,645 | – | – | 101% | – | – |
| 生鮮魚介 | 3,033 | 1,377 | 220 | 100% | 102% | 98% |
| 鮮魚 | 2,889 | 1,297 | 223 | 102% | 102% | 100% |
| マグロ | 463 | 157 | 295 | 108% | 107% | 101% |
| アジ | 103 | 57 | 179 | 106% | 92% | 115% |
| イワシ | 39 | 30 | 127 | 122% | 94% | 128% |
| カツオ | 183 | 88 | 209 | 98% | 95% | 105% |
| カレイ | 52 | 35 | 149 | 96% | 103% | 94% |
| サケ | 437 | 173 | 253 | 108% | 107% | 101% |
| サバ | 74 | 58 | 127 | 119% | 118% | 101% |
| サンマ | 9 | 5 | 180 | 225% | 167% | 114% |
| タイ | 80 | 40 | 202 | 101% | 138% | 73% |
| ブリ | 135 | 81 | 167 | 76% | 84% | 91% |
| イカ | 137 | 73 | 188 | 96% | 101% | 95% |
| タコ | 101 | 45 | 222 | 94% | 122% | 77% |
| エビ | 199 | 93 | 215 | 93% | 104% | 90% |
| カニ | 24 | 8 | 306 | 71% | 89% | 81% |
| 刺し身盛り合わせ | 309 | 79 | 392 | 103% | 91% | 114% |
| 貝類 | 143 | 78 | 184 | 75% | 98% | 77% |
| アサリ | 37 | 25 | 152 | 97% | 96% | 105% |
| シジミ | 27 | 17 | 159 | 100% | 100% | 100% |
| カキ | 9 | 5 | 183 | 129% | 83% | 154% |
| ホタテ貝 | 40 | 11 | 355 | 44% | 41% | 104% |
| 塩干魚介 | 1,078 | 464 | 232 | 101% | 101% | 100% |
| 塩サケ | 216 | 105 | 205 | 106% | 103% | 102% |
| タラコ | 173 | 51 | 339 | 101% | 111% | 90% |
| シラス干し | 141 | 33 | 425 | 96% | 89% | 106% |
| 干しアジ | 46 | 28 | 164 | 102% | 100% | 103% |
| 他の塩干魚介 | 502 | 245 | 205 | 101% | 98% | 103% |
| 魚肉ねり製品 | 680 | – | – | 103% | – | – |
| 揚げかまぼこ | 180 | – | – | 104% | – | – |
| ちくわ | 172 | – | – | 104% | – | – |
| かまぼこ | 224 | – | – | 98% | – | – |
| 他の魚肉ねり製品 | 104 | – | – | 112% | – | – |
| かつお節・削り節 | 75 | 15 | 505 | 114% | 115% | 99% |
| 魚介の漬け物 | 204 | – | – | 107% | – | – |
| 魚介のつくだ煮 | 60 | – | – | 95% | – | – |
| 魚介の缶詰 | 261 | – | – | 103% | – | – |
| 他魚介加工品その他 | 254 | – | – | 95% | – | – |
| 米 | 3,396 | 4,550 | 75 | 176% | 98% | 179% |
| パン | 2,778 | 3,299 | 84 | 98% | 94% | 104% |
| 麺類 | 1,935 | 2,922 | 66 | 107% | 102% | 105% |
| 肉類 | 8,175 | – | – | 103% | – | – |
| 生鮮肉 | 6,552 | 4,049 | 162 | 103% | 99% | 104% |
| 牛肉 | 1,596 | 437 | 365 | 99% | 102% | 97% |
| 豚肉 | 2,844 | 1,814 | 157 | 104% | 101% | 104% |
| 鶏肉 | 1,572 | 1,458 | 108 | 103% | 93% | 111% |

（次ページ左欄上に続きます）

〈豊洲の旬〉 生鮮カツオ
小型に倍値で売りにくい　（8月12日水産経済新聞）

**東京都中央卸売市場カツオの取引価格中値**　（単位：円/㌔）

| | 7月 | | | | 8月 | | | | 9月 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1週 | 2週 | 3週 | 4週 | 1週 | 2週 | 3週 | 4週 | 1週 | 2週 | 3週 | 4週 |
| 2025 | 960 | 1,020 | 1,125 | 900 | | | | | | | | |
| 2024 | 700 | 600 | 600 | 600 | 430 | 563 | 1,025 | 620 | 770 | 580 | 700 | 680 |
| 2023 | 590 | 500 | 420 | 400 | 420 | 738 | 680 | 560 | 610 | 600 | 680 | 575 |

東京都中央卸売市場　市場取引情報　週間市況から
※グラフ・表とも23、24年は、25年の週に対応するとされる週の値で、当時の週表記とは異なる

６月以降の水揚げが失速して不漁年の様相を呈している生鮮カツオは、主産地の宮城・気仙沼港で８月１日に今シーズン初めて一日で２００トンを超す水揚げがあったものの、１・５～２キロサイズと魚体が小さく、卸値も絶対量不足で高いことから売りにくい夏が続いている。“戻りガツオ”シーズンのはずの秋も薄漁となれば早々に三陸沖の漁を切り揚げる船が多くなる可能性も指摘されていて、ここ数年より早く終漁する可能性がある。東京都中央卸売市場の週間市況によると、７月は第１週から第４週まで一日平均取扱数量は前年や前々年の半減水準となる２０トン台と低空飛行した。卸売価格も中値でキロ１０００円前後で倍値と、量販するのに難しい価格を抜け出せていない。卸担当者は「小さいサイズ感なのが販売面では逆風」と話す。１・５～２キロサイズは量販サイズではあるが、価格が高止まりして鮮魚専門店はともかく量販店・スーパーには手が出ない。飲食業が寿司種などの種物として必要とする３キロアップはわずか。戻りガツオシーズンに向かう時期らしく「脂っ気はある」ものの、サイズ感と価格が消費地の求めるニーズと合わない。今年は北上群が極端に薄いためにまき網船の活躍の場がなく、ほぼ一本釣り船の独擅場。その一本釣り船は６月としては５年ぶりにみえたビンナガで大きく水揚金額を稼ぎ、無理に晩秋まで操業を延ばさなくてもよい状況という。

（右欄上に続きます）

現状、新口（日帰り）で持ち帰るのがぎりぎり間に合う程度と漁場も決して近いといえず、「秋口になってもカツオの釣果が今以上に上向かなければ早々に今期の漁を打ち切る可能性がある」点を懸念している。３キロアップがみえない不漁年は過去にもあったが、「当時は長崎などで補えたが、今年はそちらもない状況。鹿児島や宮崎で散発的に揚がるのでそちらで間に合わせている」という。また、生鮮カツオの２８年連続水揚げ日本一達成中の宮城・気仙沼港はこれから先行する千葉・勝浦港をとらえるには相当積み上げる必要があり、首位キープに黄信号がともっている。（八田）

〈流通・小売〉 販売統計２５年６月
水産は前年比０.５％減　（8月12日水産経済新聞）

食品スーパー（ＳＭ）が主体の流通３団体がこのほど発表した「スーパーマーケット販売統計調査」２０２５年６月実績によると、総売上高は既存店前年同月比１０３・２％の１兆７６８億８８０２万円となり、２８か月連続で前年同月を上回った。水産部門は８６１億２１５６万円（９９・５％）で５か月連続減（５月実績は速報版で１００・０％だったが、確報版では９９・９％と下方修正）で、前年と比べると減少基調が続いている。マグロやカツオ、サーモンなどの刺身類は好調で、前月よりやや持ち直した店舗が多かった。ウナギも気温の上昇により、輸入品を中心に好調。ブリやホタテは相場高で伸び悩んだ。シラスの不漁により、小魚カテゴリー全体が低迷し、魚卵・塩干も厳しい状況が続いた。食品合計は９８６４億４３９４万円（１０３・５％）、生鮮３部門合計は３５１５億８１１９万円（１００・５％）。相場に落ち着きがみられ、単価が下落傾向にある青果は１４２９億９０９８万円（９９・７％）、気温上昇により、焼き肉需要に回復傾向がみられた畜産は１２２４億６８６５万円（１０２・３％）となった。コメ価格の高騰によりおにぎりや弁当などの米飯類が好調だった惣菜は１１７４億５１５１万円（１０３・７％）だった。

（次ページ左欄上に続きます）

## 〈流通・小売〉 外食産業市場動向調査６月
## 猛暑で冷たいメニューなど好調 （8月12日水産経済新聞）

日本フードサービス協会（久志本京子会長、ジェフ）がまとめた２０２５年６月の外食産業市場動向調査によると、下旬を中心に６月としては記録的高温となったため、冷たい麺類メニューやビール類、飲料などが好評だったほか、割得なキャンペーンが好調で、売り上げは１０６％と堅調だった。一方で、暑すぎる天候は一部で客足にマイナスとなり、土曜が少ない曜日回りなども影響し、客数の伸びは鈍化。業態によっては客数が前年を下回った。

業態別では、ファーストフード業態の売り上げは１０６・９％。持ち帰り米飯・回転寿司は客単価上昇で売り上げ１０３・４％、客数は前年を下回り９４・７％となった。

ファミリーレストラン業態の売り上げは１０４・６％。低価格業態が引き続き好調。パブ・居酒屋業態の売り上げは１０２・３％だった。飲酒業態はビール類などの販売好調が客単価を押し上げた。

一部では新型コロナウイルス禍後続いてきた上昇・回復傾向にも一服感が出ており、客数などに頭打ち感もみられた。

### 6月全店データ

（単位＝%）

| | | 売上高 | 店舗数 | 客　数 | 客単価 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 前年比 | 前年比 | 前年比 | 前年比 |
| | 全　体 | 106.0 | 100.7 | 101.9 | 104.1 |
| ファーストフード | 合　計 | 106.9 | 101.3 | 102.1 | 104.7 |
| | 洋　風 | 105.2 | 101.7 | 104.5 | 100.7 |
| | 和　風 | 112.5 | 102.7 | 100.3 | 112.2 |
| | 麺　類 | 109.0 | 100.7 | 105.0 | 103.9 |
| | 持ち帰り米飯/回転寿司 | 103.4 | 99.6 | 94.7 | 109.2 |
| | その他 | 103.1 | 101.3 | 99.8 | 103.3 |
| ファミリーレストラン | 合　計 | 104.6 | 99.3 | 101.5 | 103.1 |
| | 洋　風 | 103.9 | 97.3 | 101.5 | 102.4 |
| | 和　風 | 107.0 | 101.1 | 102.8 | 104.1 |
| | 中　華 | 108.9 | 102.7 | 102.8 | 106.0 |
| | 焼き肉 | 99.6 | 100.8 | 95.1 | 104.7 |
| パブ／居酒屋 | 合　計 | 102.3 | 100.5 | 99.7 | 102.6 |
| | パブ・ビアホール | 101.1 | 102.6 | 98.4 | 102.7 |
| | 居酒屋 | 103.0 | 99.9 | 100.5 | 102.5 |

（右欄上に続きます）

## 〈流通・小売〉 東京都区部小売価格６月
## 水産品目は値下げ優勢 （8月12日水産経済新聞）

| 品目 | 銘柄 | 単位 | 2024年 | 2025年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 6月 | 4月 | 5月 | 6月 | |
| | | | | | | 上旬 | 中旬 |
| マグロ | メバチまたはキハダ、刺身用、さく、赤身 | 100㌘ | 519 | 492 | 490 | 492 | 511 |
| 生サケ | トラウト、アトランティックサーモン | 100㌘ | 507 | 527 | 523 | … | 533 |
| サバ | マサバ、ゴマサバ切身 | 100㌘ | 132 | 147 | 149 | 136 | 128 |
| ブリ | 切身（刺身用を除く） | 100㌘ | 369 | 373 | 378 | 376 | 382 |
| イカ | スルメイカ、丸 | 100㌘ | 258 | 262 | 269 | 242 | 234 |
| タコ | 真ダコ（ボイルまたは蒸し） | 100㌘ | 478 | 532 | 528 | … | 520 |
| エビ | 輸入物、冷凍、パックまたは真空、無頭10～14尾入り | 100㌘ | 352 | 378 | 388 | … | 380 |
| ホタテ貝 | 養殖物、むき身ボイル | 100㌘ | 332 | 409 | 398 | … | 417 |
| 塩サケ | ギンザケ、切身 | 100㌘ | 285 | 314 | 325 | 320 | |
| タラコ | 切れ子を含む、並 | 100㌘ | 520 | 500 | 516 | 514 | |
| 干アジ | マアジ、開き、並 | 100㌘ | 202 | 187 | 185 | 194 | |
| カマボコ | 蒸板付、80～140㌘並 | 100㌘ | 211 | 215 | 216 | 214 | |
| イクラ | サケ卵、塩漬または醤油漬、並 | 100㌘ | 1,857 | 2,398 | 2,438 | 2,412 | |
| 鶏卵 | 白色卵、Ｌサイズ、パック詰（10個入り） | 1パック | 281 | 313 | 314 | 314 | |
| 牛肉 | 輸入冷蔵、ロースまたはもも肉 | 100㌘ | 343 | 358 | 365 | … | 361 |
| 豚肉 | バラ（黒豚除く） | 100㌘ | 266 | 277 | 274 | … | 273 |
| 鶏肉 | ブロイラー、もも肉 | 100㌘ | 142 | 144 | 150 | … | 155 |
| もやし | 緑豆、根切りもやし除く | 100㌘ | 177 | 177 | 178 | … | 179 |
| だいこん | | 1㌔ | 215 | 238 | 224 | 212 | 220 |
| きゅうり | | 1㌔ | 554 | 671 | 562 | 595 | 606 |
| ワカメ | 生・ボイル塩、国産、並 | 100㌘ | 326 | 352 | 360 | 369 | |
| バナナ | 高地栽培除くフィリピン産 | 1㌔ | 328 | 346 | 354 | … | 346 |
| おにぎり | サケ入り、並 | 1個 | 153 | 173 | 177 | 181 | |
| 弁当 | 持ち帰り、幕の内、並 | 1個 | 597 | 640 | 619 | 627 | |
| すし（弁当） | 持ち帰り、握り8～10個入り、並 | 1パック | 846 | 850 | 854 | 894 | |
| すし（外食） | 握り、並、持ち帰りは除く | 1人前 | 1,628 | 1,723 | 1,723 | 1,723 | |
| すし（外食） | 回転ずし握り、マグロ赤身2個、持ち帰りは除く | 1皿 | 185 | 199 | 199 | 201 | |
| ウナギ蒲焼 | 国産、長焼き、1尾120～210㌘、並 | 100㌘ | 1,468 | 1,446 | 1,444 | 1,535 | |
| 焼き魚 | サバまたはサケ切身、塩焼き | 100㌘ | 355 | 373 | 383 | 382 | |

東京都区部の２０２５年６月の小売価格動向によると、水産関連品目は５月に比べて値下がり優勢だった。前月と比較して値下がりした主な水産関連品目は、サバ（中旬比１４・１％安）、イカ（１３・０％安）、タコ（１・５％安）、エビ（２・１％安）、塩サケ（前月比１・５％安）、タラコ（０・４％安）、カマボコ（０・９％安）、イクラ（１・１％安）、焼き魚（０・３％安）となった。一方、前月と比較して値上がりした主な水産関連品目はマグロ（中旬比４・３％高）、生サケ（１・９％高）、ブリ（１・１％高）、ホタテ（４・８％高）、干アジ（前月比４・９％高）、寿司（弁当）４・７％高、寿司（回転寿司）１・０％高、ウナギ蒲焼（６・３％高）などとなった。

（次ページ左欄上に続きます）

## 【さかなの動き】 養殖マダイ 愛媛浜値９００円台維持　記録的な安定相場続く　(8月12日みなと新聞)

愛媛県産養殖マダイの８月初旬の産地相場は、ほぼオールサイズでキロ９３０円。この相場は１４カ月連続で、キロ９００円台は３６カ月連続。保合いが続き、当面動く気配は見当たらない。この記録的な相場の安定は今後も続きそうだ。しかし、餌料や資材の高騰、高水温による疾病や給餌量の減少による歩留まり低下など生産者の収益悪化リスクに警戒が必要だ。物価上昇による消費者の節約志向で消費は弱まっている。　相場は２０１７～１９年に９００円を上回る相場が２２カ月続いた。その後２０～２１年前半にコロナの影響で需要が激減し、６００～５００円台に低迷。同１０月に７５０円に回復した後、２２年9月９００円にまで上がった。昨年７月の９５０～９３０円から高値安定が続く。高値による消費離れも危惧されるが、相場の安定は養殖魚に求められる重要な要素。この５年ほどマダイ種苗の池入れは４０００万尾を切る抑制状態で需要と供給のバランスを保っている。　今年上期の韓国向け輸出は、数量が前年同期比２６・８％増の２９４０トン、金額は２５・８％増の２９億６９０７万円。年間は２０年４０１６トン、２１年４６８１トン、２２年５３３１トン、２３年４５８６トン。２４年４９３５トンで推移する。

## マグロ情報 豊洲７月 冷バチ相場一段高へ 各国の出し渋りも要因か　(8月15日水産経済新聞)

豊洲市場の7月の冷凍大バチ（４０キロ上）の上場本数は１万８４４本で、前年同月から１４％の減少に転じた。運搬船の端境期で、刺身用の冷凍赤身（メバチ、キハダ）の不足感が顕著になっている。再び荷が集中する年明け以降までに、どれだけの原魚を確保できるかが焦点で、良品を中心に各社の奪い合いが始まっている。数量が最も多い西経・太平洋銘柄（７１５８本）の公表値キロ当たり中値は１０６８円（前年同月比１０％高）で、６月の１０１８円から一段高になった。

（右欄上に続きます）

一昨年同月の１０３５円も上回っており、早々に１１００円台へと到達する勢いだ。要因の一つに、海外船の稼働が落ちていることが挙げられる。昨年の台湾船減船に加え、韓国と中国の実稼働隻数が減っていることも大きい。さらに、例年よりも前倒しで日本国内の相場が上昇に転じたことから、各国の出し渋りが始まったとみられる。卸担当者によると、現地の冷蔵庫から出方をうかがうことで「本来ならばすでに、日本に到着しているべき赤身の搬入が遅れている」という。品薄感をたきつけ、相場を過熱させる要因となっている。今年は台湾船で、豪州沖の刺身用ビンナガが豊漁だと伝わっている。しかし現時点で、日本へと輸入されるペースは思いのほか鈍い。「相場の仕切り直しをしているのでは」と、関係者の間では取り沙汰されている。

**近海の生鮮クロマグロ失速**　日本近海の生鮮天然クロマグロは１６９７本（１３％増）を上場した。５０７本（３８％増）に達したまき網物の増加が主な要因だ。ただし相場が振るわない。品質が劣る魚の混じりが増え、足を引っ張った影響から、大型（１００キロ以上）のキロ当たりセリ値（発表値の平均）は、まき網物で３４４１円（１４％安）、それ以外が４７８６円（３７％安）へと落ち込んでしまった。その穴埋めとして国産養殖物は、本数が８０本（３６％減）にとどまり、セリ値は公表されなかったが、安定した品質が重宝されたといわれる。輸入の生鮮ミナミマグロも、数量で１７％減の３１８６本だったものの、発表値の平均は豪州産が４３９２円（２３％高）へと持ち直している。

## 家計支出調査６月 魚貝類、５カ月連続実質減 名目は増で食い違い続く　(8月15日水産経済新聞)

総務省は８日、家計支出（家計調査報告、２人以上の世帯）の２０２５年６月分を発表した。

（次ページ左欄上に続きます）

消費支出全体は実質（消費者物価指数で補正して比較）前年比１・３％増と２か月連続の実質増となった。ただ、コメを含む穀類の大幅減で食料は３か月ぶりの実質減に転じた。魚介類は５か月連続の実質減だった。魚介類の支出金額は５６４５円で実質２・７％減。見かけ（名目）では１・１％増で４か月連続増となり、実質と名目で増減の食い違いは続いている。内訳では、生鮮魚介が３０３３円で実質２・６％減・名目０・５％増、塩干魚介が１０７８円で実質５・２％減・名目１・２％増、魚肉ねり製品が６８０円で実質１・５％増・名目２・９％増、他の魚介加工品が８５４円で実質２・９％減・名目１・５％増だった。名目では全中分類で前年を超えた。生鮮魚介類のうち金額で５０円以上あり名目増減（以下のカッコ内はいずれも名目増減）で前年比減が目立ったのは、ハマチ含むブリ（２４・２％減）、エビ（６・６％減）、タコ（６・５％）だった。ホタテは６割近く前年から減少し、月間消費額が５０円未満に沈んだ。一方、支出金額が５０円以上ある中で増加が目立ったのはサバ（１９・４％増）、マグロ（７・９％増）、アジ（６・２％増）など。

**ウナギ蒲焼２割増**　塩干魚介の名目の増減では、塩サケ（５・９％増）が目立った。シラス干（４・１％減）は引き続き不足感がありマイナスが続いた。魚肉ねり製品は、他の魚肉ねり製品（１１・８％増）が２ケタ増。他の魚介加工品ではカツオ節・削節（１３・６％増）が前年を大きく上回った。ウナギの蒲焼（１９・８％増）は、一時的に値頃感のあるものが出回ったことで活発に使われて２割増となった。外食の寿司（８・１％増）は４か月連続増だった。

## 天然クロマグロ入荷１３％増 豊洲市場 ７月国内生鮮大物

（8月13日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場７月の生鮮大物売り場、国内物の入荷本数は１９３３本と前年同月比で７・６％増加した。クロマグロの天然物が全体では増えたが、養殖クロマグロとキハダは前年を下回った。

（右欄上に続きます）

メバチはほぼ前年並みで引き続き低調だった。クロマグロ全体の入荷本数は前年同月比９・４％増の１７７７本で、このうち天然物は１３・２％増の１６９７本だった。巻網物の増加が主な要因で、内訳は主力の宮城・塩釜産が３６５本（前年同月２７４本）、鳥取・境港産が１２６本（同８６本）の他、北海道・釧路沖からも４本（同８本）が入荷。また、今年は福岡産１２本も新たに入荷した。巻網物全体では５０７本（同３６８本）と３７・８％増えた。一方、巻網以外の延縄、釣、定置などの合計は１１８２本（同１１２８本）と４・８％増加にとどまった。主要二大産地からの入荷が振るわず、日本海の釣物主体に、大間など津軽海峡産延縄物込みの青森産が４５２本（同５１４本）、噴火湾の定置網物主体に松前・吉岡の延縄、釣物込みの北海道産が２８６本（同４２０本）と、いずれも前年を下回った。これに対し、延縄物を主体とする他各地からの入荷は全般に順調で、東北日本海海域からは、秋田産が５９本（同２本）、山形産が１４本（同１１本）に増加。昨年は不漁だった沖縄産も１２本（同１本）が入荷した。この他、延縄に定置網を含む鹿児島産が２５本（同２本）、釣の壱岐産主体の長崎産が１１０本（同なし）、下関沖延縄物などの山口産が３１本（同なし）と九州、山陰筋も好調な入荷だった。　定置網物は、能登や七尾などの石川産が６５本（同２４本）、石巻などの宮城産が２６本（同３本）、福井産が１６本（同８本）、京都・舞鶴産は１５本（同５本）といずれも増加して順調な入荷。ただし、新潟・佐渡産の３３本（同７４本）、高知産の１１本（同１７本）の２産地は前年を下回った。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、巻網物以外の大型（１００キロ以上）がキロ４７８６円で前年同月比３７・４％安、

（次ページ左欄上に続きます）

中型（１００キロ未満４０キロ以上）が４５２３円で１０・３％安、小型（４０キロ未満）は２５７６円と３０・３％安だった。ただし、セリでは１万円以上の好値が頻発したが、「産地側の希望値との差があって相場が公表できなかった」（卸会社）という噴火湾産定置物などの相場が含まれないため、大型などは実際取引価格はもう少し高かったもよう。巻網物は、大型が同３４４１円と１４・２％安、中型が３１５０円と１８・５％安、小型が同１６４５円（前年なし）だった。月間の最高値は３１日に入荷した青森・大間産の縄物（５９キロ）で、２万円だった。

**養殖物のセリ場売りは４割減少**　養殖マグロのセリ場売りは８０本（前年同月１２５本）と３６％減少した。産地別の内訳は、主力の長崎産が５１本（同７４本）、舞鶴産が１２本（同９本）、高知産が７本（同２８本）、三重産が５本（同１２本）など。前年はなかった鹿児島産が５本入荷した。セリ値は発表されなかったが、実勢取引価格は、７０キロ上サイズがキロ３６００～３４００円、５０キロ上が３４００～３２００円、４０キロ下は３２００～２９００円前後。メバチ全体の入荷本数は１１７本（前年同月１１０本）とほぼ前年並み。主力の和歌山・那智勝浦産が９８本（同８１本）と増加したが、三重産が７本（同１４本）、小笠原産も２本（同１４本）と低調だった。この他、前年はなかった宮城産の巻網物が１０本入荷した。発表されたセリ値の平均はキロ１１７１円と７・２％安だった。那智勝浦産の多くが釣物だったため、釣物より身質評価の高い延縄が多かった昨年に比べてセリ値が下がったとみられる。巻網物は発表されなかった。キハダ全体の入荷本数は３９本（前年同月６２本）と前年同月比３７・１％減少。三宅島、八丈島などの伊豆諸島産が５本（同３４本）と落ち込んだことが主な要因。その他、沖縄産が１本（同１３本）、館山などの千葉産が８本入荷した。また、前年になかった巻網物は、三重・南島産が１６本、千葉・銚子産が８本あった。発表されたセリ値の全体平均は、キロ１２６６円と３３・５％高だった。巻網物は相場が公表されなかった。（時事）

（右欄上に続きます）

## 秋漁６魚種見通し　過半数の魚種で来遊減少
## サンマ、マイワシがカギ　（8月18日水産経済新聞）

**秋漁主要魚種の来遊見通し（2025年）**

| 魚種 | 概要 | 動向 |
|---|---|---|
| 秋サケ | 北海道の来遊は漁獲量で3万トン前後の予測と記録的不漁の見通し。親魚確保にも影響か | ↘ |
| マサバ | 海況に前向きな予報もあるが、資源量の激減で、太平洋の来遊はさらに減少する可能性も | ↘ |
| サンマ | 昨年並みの低水準となる。早期来遊は全体の2割に満たないため、出遅れは避けられず | → |
| マイワシ | 昨年の早過ぎる北上・遅い南下も異常だが、今年の漁場形成は輪を掛けて〝海況次第〟 | → |
| スルメイカ | 日本海側は全海域で来遊が前年を下回る見通し。太平洋側は道東などで上向きの見通しも | ↘ |
| カツオ | 常磐・三陸沖の6、7月は近年最低水準。11月までの来遊は昨年や過去10年平均を下回る | ↘ |

秋が盛漁期の主要６魚種の研究機関による来遊見通しが出揃った。秋サケ、マサバ、スルメイカ、カツオの４魚種で前年に比べ来遊減となる厳しい見通しが示された。秋の食卓での天然魚不足は、前年にも増して深刻化しそうだ。秋の来遊量の比較では前年から横ばいとなっているが、今年は魚体サイズに回復傾向がみられるサンマと、年間漁獲が６０万トン超で安定しているマイワシで、どううまく「仕事」をしていくかが焦点となりそうだ。

**秋サケ　過去最低更新、３５％減を予測**　今年の北海道の秋サケ来遊予測値は昨年実績（１７７０万尾）をさらに３５％下回る１１４１万尾。平成以降最低という、かつてない厳しい数字がはじき出されている。昨年の３年魚（２０２１年級）の来遊が８９万尾と過去最低水準にまで減少したため、今年の４年魚の回帰が多くを見込めないことが大きな要因。特に多獲地帯のオホーツク東部地区や根室北部地区の落ち込みが響いている。主群となる４年魚が少ない分、５年魚の割合が高くなるため、例年より前期の来遊割合が高まるとみられている。

（次ページ左欄上に続きます）

**マサバ　海況は良好も、資源量乏しい**　太平洋サバの今年の海況は、これまでより少し前向きな予報が出ている。三陸南部海域では８～１０月に、北部海域よりも先行して水温が低下すると予測されているためだ。金華山沖周辺が「マサバの主漁場となりやすい水温環境」としている。　ただし資源量自体が急激に減少しており、絶対量が乏しい。産卵漁場の伊豆諸島周辺でのたも抄い・棒受網漁業や、犬吠埼以北のまき網、定置網、底びき網のいずれも、上半期（１～６月）は前年の漁獲量を下回った。

**サンマ　低水準脱せず、魚体は大きめ**　思わぬ良型の流し網サンマの３年ぶり水揚げに期待が高まった今年のサンマ漁だが、水研機構が７月下旬に発表した２５年度サンマ長期漁海況予報（道東―常磐海域）によると、「昨年並みの低水準」という厳しい予測だった。昨年と同程度ならまだよいが、気掛かりなのは８～９月の早い時期に日本近海への来遊が見込める１区の来遊全体に占める割合が昨年（５２・８％）から大きく減少し１４・６％しかないこと。出遅れは避けられそうになく、不漁年ムードが醸成される可能性がある。魚体は予報時点で前年より約２０グラム大きく、漁獲の中心となる１歳魚は前年より大きめになる。

**マイワシ　主群つかめず、海洋環境次第**　道東沖漁場は昨年の「早過ぎる北上と遅い南下」に対し、今年は大きな北上群に当たっていない。８月上旬でも犬吠埼周辺で漁獲されている。この先、主群がどこに出現するかが分からない。海況次第では旧盆明けに道東沖が主漁場になるかもしれないし、親潮第１分枝が１０月以降も張り出さなければ、三陸沖と上半期に好成績を収めた常磐沖への来遊量が減る。資源量自体が前年を下回る中、漁場形成は海洋環境に大きく左右されており、研究機関も「予測は困難」としている。

**スルメイカ　厳しい日本海、有漁点は最低**　スルメイカは依然として厳しい見通しだ。今後の主漁場となる日本海側の来遊は全域で「前年を下回る」と予想されている。

（右欄上に続きます）

漁場一斉調査による有漁点は突出して過去最低割合となるなど明るい兆しはみえてこない。すでに漁獲不振となっているが、研究者も「資源量の厳しさ」を指摘する。一方で太平洋側は全海域で前年並みか上回る予報となった。漁場調査では厳しい状況に変化はないものの、沖合域での調査や漁獲状況などから、今後は魚群が道東に向かうと予想されるなど上向きになる可能性が高い。

**カツオ　近年で最低も、８月北限道南**　水産研究・教育機構は６～１１月の常磐・三陸沖におけるカツオ来遊は「昨年および過去１０年の平均を下回る」との予測を出した。期間中の一日一隻当たり漁獲量（ＣＰＵＥ）が下振れすると過去１０年平均を大幅に下回る近年最低の３トン前後になる可能性がある。直近８月の主な分布域は、北限は前年同様に道南海域まで達すると予想されている。漁業情報サービスセンターの「おさかなひろば」によると、全国主要港の合計で６月は１７６０トン、７月は３１３１トンとともに過去５年で最低だった。８月半ば以降にどれだけ漁獲がまとまっても不漁年を返上するのは難しそうだ。

【さかなの動き】　国産サバ 輸出２倍、東南アジア牽引 上期 不漁でピークの４分の１（8月19みなと新聞）

２０２５年上期（１～６月累計）の日本産冷凍サバ輸出量は計４万７３９７トンと、前年同期比２倍に増えた。ベトナム、タイ国など東南アジア向けがけん引した。缶詰や骨なし魚など加工原料として引き合いがあるようだ。ただ、上期としては最多の１８年の１９万３９３０トンと比べると４分の１の水準にとどまる。近年の国内の不漁が背景。２５年上期の輸出を国別でみると、最も多かったベトナム向けは１万３７９８トンと前年同期比１・６倍。単価は１％高の２００円と高止まりした。

（次ページ左欄上に続きます）

２番目に多かったタイ国向けは１万３６４５トンと２・４倍に伸び、１位のベトナムに迫った。単価は２％安の１４５円。３番目のフィリピン向けは７５２３トンと６・４倍に急増し、単価は１０％高の１５３円に上昇した。これら東南アジア向けは伸びた一方、アフリカ向けは低迷し、４番目に多かったエジプトは３２％減の２６２６トン。単価は主要国で最高の２０９円（前年同期比２０％高）に跳ね上がった。５番目のナイジェリアは１６８５トン。前年同期がわずか１６６トンにとどまったため、計算上１０倍に増えた。絶対量は少ないままだ。単価は２０２円（２２％高）と２００円の大台を超えた。

サンマ商戦、活気ある出足 札幌、仙台、豊洲
久々の良型が値頃に　（8月19日水産経済新聞）

【札幌】札幌市場で１６日、棒受網船のサンマの初セリが行われ、０・９キロ４尾入りの大型に最高値キロ８万８８８８円が付いた。入荷量は昨年初セリ時（８月１７日）のおよそ１・５倍、魚体は２キロ１３尾前後主体と近年にない良型。週明け１８日も５０トン余りが取引され、活気の中でサンマ商戦がスタートしている。

**=札幌市場=　初セリ９万円弱**　同市場に１６日は、前日根室・花咲に水揚げされた約１万２０００箱（１キロ、２キロ、４キロ版）が入荷した。セリでの最高値は昨年初セリ（４０万円）を下回った。今年は７月に流し網で漁獲されたサンマが、“初物”としてすでにお目見えしていたことや、１６日にも花咲、厚岸で５００トン余りが水揚げされ、週明けに一定量の出回りが見込まれることなどが影響した。中心相場は２キロ１１尾入りで３５００～２５００円前後、１３尾入りで１６００～１４００円など。卸によると相対での価格は中心の４キロ３０尾が１０００円前後。昨年は４０尾が１０００円前後だったといい、消費者には良型がより値頃で届くことになる。１５０グラムアップ級が多く並んだセリ売場を見た卸の担当者からは「こんな大きなサンマが入るのは数年ぶりでは」と驚きの声が聞かれていた。

（右欄上に続きます）

最高値のサンマの仕向け先である鮮魚店を営む吉本水産（株）（札幌）の東城哲也店長は、「この時期のサンマとしては例年になく大きい。貴重な鮮魚商材なので、今後も多くの水揚げが続くことを期待したい」と話していた。１８日のセリでは２キロ１３尾入りは１５００円前後。相対の価格は「ややこなれた」（卸）という。

**=仙台市場=　本格入荷日９万円**　【仙台】仙台市場では１８日、約１７トンと今年初のまとまった数量が上場した。中心サイズは１２０～１５０グラムで、大きいものは２２０グラムもあり、いずれも粗脂肪率が２０％を超えており、市場関係者は「このような良型の入荷は１０年ぶり」と目を丸くしていた。価格は高値がキロ９万円、安値が１１００円で、中値は２０００～１２００円だった。昨年の同時期と比較すると３００～５００円ほど高かった。この日１３トンを取り扱った（株）仙台水産（本田誠社長）は、ツミレ汁２００食の試食イベントを開催し、市場関係者に本格入荷をＰＲ。多くの買参人がツミレ汁を味わったり、売場に並ぶ大型を見たりしながら「こんなに立派なのは久しぶり。昨年と比べると違う魚のようだ」「味も脂が乗っていて本当にうまい」と目を輝かせていた。

**=豊洲市場=　量２倍も堅調相場**　東京・豊洲市場では旧盆の３連休明けの１６日に１３トン、日曜休市を挟んだ１８日に８８トンの棒受網物の入荷があった。最初の２日の入荷量としては前年（４５トン）の２倍以上あったが、１８日の卸売価格は北海道産の４キロ２６～２８尾サイズでキロ１０００円中心（前年は１１００円）と堅調で、好スタートを切った。好値の理由は魚体の大きさ。一尾１４０グラム中心と前年に比べ大きくサイズアップ。「久々に初物関係なく『食べたい』と思える魚」（水産卸）が揃った。

（次ページ左欄上に続きます）

重量増で１尾単価が高く付くため、量販店・スーパーはやや買い控えがあったものの、全体的な動きはよかった。ただ、後続は漁場が遠方ゆえに入船が遅れがちで、鮮度の甘い魚もあるとの情報もあって「入船タイミングがまだ不安定で、相場と身質の安定には少し時間がかかる」（同）と不安視する向きもある。

## 豊洲市場の道東青物動向 待たれる棒受物の安定入荷 近年にない好魚体は確実（8月21日水産経済新聞）

東京・豊洲市場の鮮魚販売で昨年に続く秋の主役となることが望まれている道東サンマは、３年ぶりの流し網物の入荷から始まった。一尾１７０グラムの良型が前年（キロ当たり５０万円）に次ぐ３０万円を記録。通常消費に回せる価格帯にならなかったため、商い的に厳しい内容を強いられたものの注目は集めた。１０日から公海に出漁した棒受網船による漁獲で、まずは入荷の安定が待たれる。盆休み前の１２日正午の時点で、台湾船と同一の漁場に早着した船だけで一晩８０トンをまとめたという。昨年の棒受網船初水揚げが６６・９トンだったので、すでにそれより多い計算。魚体も大型の割合が４割との報告が上がっており、近年はみられなかったような好魚体というのは確実なようだ。１６日と１８日の２日間にあった豊洲市場の入荷では、一尾１４０グラム主体で前年の２倍の入荷水準を記録した。６～７月に行われた調査では、日本近海に８～９月に来遊が期待できる東経１６５度以西の群れは薄く、序盤の出遅れが懸念されていた。ただ、初水揚げ分は西方回遊が始まってからの東経１６０度付近で漁獲と、１０～１１月に来遊する群れの先端まで捕らえに行った形。漁場までが遠いので水揚げが断続的にならざるを得ないことは確かだが、一度の入荷はまとめられそうだ。魚体が久々に大きいことで１尾売りが高くつきそうなのが、今後に量販をしていくにはネックとなりそう。卸担当者は「入船タイミングがバラけて入荷が続けばよいが、途切れ途切れとなり浜値が下がりきらないと１尾単価が高くなり、最初のうちは量販できる価格にならないかもしれない」と心配する者もいる。

（右欄上に続きます）

内臓からの鮮度劣化を助長するアミ食いの割合は早くも減少しているといい、漁場が遠い割に鮮度低下が早まる恐れはなさそうだが、小売的に量販する価格帯にいつ入るかがカギとなりそうだ。

**マイワシは前半苦戦**　一方、道東マイワシは千葉・銚子や日本海で鮮魚サイズが一定量が豊洲市場へと供給され続けた中、水揚げの絶対量が少なかったために前半戦で存在感を出せなかった。サイズも９０～１００グラムはわずかで、鮮魚向けに最適化した操業でもないため、前年に比べてセリ場に出回る機会は少なかった。盆明けの後半戦で出番を増やせるかどうかは、全体の水揚げの絶対量とサイズ次第となりそうだ。

## アルゼンチンアカエビＬ２内販最高値 南部漁場 新物さらに上昇へ（8月20日みなと新聞）

生食可能な有頭エビとして需要のあるアルゼンチンアカエビ（ＡＲアカエビ）。今年は政府管轄水域（南部漁場）の操業開始が大幅に遅れたことで有頭品が品薄高に。８月中旬現在でＬ２（キロ当たり２０～３０尾）の内販価格（商社出し値）は過去最高値まで上昇している。ある商社によると、フリー在庫はないものの、相対での昨年産の内販価格は８月中旬時点で、Ｌ１（同１０～２０尾）とＬ２がキロ１５５０～１４００円の水準。前年同月はＬ１が１６００～１５８０円、Ｌ２が１１００円だった。同商社は「Ｌ２は過去に１５００円を超えたことがなく、過去最高値だ」と指摘する。新物価格については「Ｌ１とＬ２ともに１６００～１５５０円に上昇するのでは」と予想。一方で、「（高値となるので）国内で１６００～１５５０円で売れるのかは分からない。他のエビ種に需要が流れる可能性もある」とみる。

**Ｌ３は搬入なしか**　８月中旬における有頭品の対日オファー価格（ＦＯＢ）はＬ１、Ｌ２とも

（次ページ左欄上に続きます）

前年同月と比べると、Ｌ１は３割高、Ｌ２は６割高（前年同月はＬ１が６・８～６・５ドル、Ｌ２が５・５～５・３ドル）と大幅に上昇した。　小型のＬ３（同３０～４０尾）はほとんど獲れていないことから、オファーはない。同商社は「今年はＬ３の新物の搬入はない」と見通す。８月中旬における無頭のＣ１（同３０～５５尾）のオファー価格（ＦＯＢ）はキロ８ドル（前年同月は８～７・５ドル）。サイズの大型化に伴い、Ｃ２（同５５～１００尾）のオファーはない。同商社は「今後のオファーはＣ１のみの見込み。３月までの前浜の漁獲分を各国購入しているので、価格は徐々に下がる可能性がある」と話す

## 外食持ち帰り市場拡大　民間調査
## ２４年はコロナ前比２４％増　（8月20日みなと新聞）

外食・中食市場情報サービスを提供するサカーナ・ジャパン（エヌピーディー・ジャパンから社名変更、東京都港区）の調査によると、２０２４年度（２４年３月～２５年２月）の外食業態テークアウト（持ち帰り）市場規模は２兆１０７５億円と前年度比２％増だった。年度成長率は２２年をピークに鈍化傾向にあるものの、依然として成長を持続。コロナ禍直前の１９年度と比べると２４％増と大きく上回った。同社は日本で新型コロナウイルス感染の影響が出始めた２０年３月を起点に３月～翌年２月を１年間と区切り、外食業態におけるテークアウト市場規模を調査・分析した。その結果、コロナ禍で急拡大したテークアウト市場がコロナ後も定着し、そのまま拡大を続ける実態が明らかになった。

**単身世帯の増加個食化が後押し**　同社の藤井真理子フードサービスシニアマネージャーは「外食業態のテークアウト市場はコロナ前の１９年比で、外食業態全体を大幅に上回る成長となっている。特に２０～３９歳の若い層や一人で食べる食事において金額市場規模が伸長しており、単身世帯の増加や個食化の流れが後押ししていると考えられる」と分析。加えて「外食業態のイートインの金額市場規模がコロナ前の水準を回復していない中、テークアウト需要に対応することで、新たな客層をつかむなど、売り上げを伸ばすチャンスとなるだろう」と見通す。

（右欄上に続きます）

## ９４％が日頃から節約意識 日本生協連調査
## 関心高まるコメ、魚は低下　（8月21日水産経済新聞）

日本生協連（新井ちとせ会長）は７日、組合員を対象に５月１３～１８日に実施した「節約と値上げ」に関する調査結果を発表した。本格化して４年目に入っている物価高騰と、主食のコメの需給が混乱する中、前年並みの約９４％の回答が日頃から節約を意識していた。家庭内で直近３か月に行った節約項目では、前年に続き「普段の食事（食料品、菓子、飲料、テイクアウトなど）」が１・０ポイントアップの６３・７％で１位を維持する形となった。前年の調査から変化があったのは２０代の動向で、「普段の食事」と答えた割合は引き続き６８・６％と高かったものの、前年からは８・２ポイント下がり、「娯楽（テレビ、ゲーム、新聞、旅行など）」を節約した割合が１２・１ポイント上がって３２・６％と、全年代でトップとなった。若い世代で「娯楽」も削り始めている人が多い。現在、節約しようとしているものや今後節約しようとしているものを尋ねると、「菓子・おやつ（４１・８％）」「デザート・スイーツ・アイス（３８・４％）」「調理済みの惣菜や弁当（３０・５％）」が前年と同じ並びでランクインした一方で、「コメ（２０・０％）」が１１・８ポイント上昇し、１６位から７位に大幅にランクアップしている。直近３か月で値上がりにより購入頻度や量が減ったものに対する回答でも、同様にコメが大幅にランクアップした。続く値上がりの影響による「食生活」の変化では、「同じようなメニューが増えた（３６・２％）」「手作りが増えた（２１・６％）」が１、２位を維持したのは同じだったが、前者は３・２ポイント、後者は４・２ポイント、前年の回答割合を下回った。新たに追加した項目の「コメの量や頻度が減った（２０・５％）」が４位に食い込んだ。前年まで４位だった「魚の量や頻度が減った（１３・２％）」については、７・４ポイント下がり、８位に後退した。調査はインターネット形式で組合員モニターに対して行われた。有効回答は６２０７件だった。

（次ページ左欄上に続きます）

## サバ情報 オファー６００円に驚愕　ノルウェー秋漁 新物一気に２００円アップ

（8月21日水産経済新聞）

ノルウェーサバの主力シーズンである秋漁が現地１２日に始まった。１７日までの漁獲は９０４１トン。平均サイズは一尾当たり約５２２グラムと比較的大型の割合が高く、順調なスタートを切った。一方、浜値は「過去最高値で、昨年同期比でおよそ１・６倍を付けている」との情報も浮上して、製品価格はキロ６００円を打診。日本のバイヤーは緊張感をもって価格動向を見守る状況が続いている。関係者によると、大型まき網船の最初の水揚げは１２日の午後で２３５トンだった。翌日こそ皆無だったが、その後は平均２０００トン近い漁獲があるなど、比較的まとまって推移している。サイズ別比率としては４００／６００グラムが全体の６～７割、次いで大型の６００グラム以上が２～３割ほどを占めているようだ。１７日現在の２０２５年シーズンの残枠は１２万５３２３トン。今シーズンは国際海洋探査委員会（ＩＣＥＳ）の勧告に従って、沿岸諸国は前年比で２割の減枠に合意している。ノルウェーにおいては前期の先取り分を考慮すると、すでに枠の２割ほどを消化した状態となっている。昨秋時点で新物の供給が限定的かつ、日本を含めアジアの在庫が少ないことから高値が予想されていたが、現地が突き付けてきたオファーは目下、Ｃ＆Ｆ（運賃込み）４００／６００グラムサイズでキロ６００円。昨年と比べると２００円も高く、関係者は一様に愕（がく）然としている。国内の大手加工業者は想定を大きく上回る異次元の水準を疑う声や、ため息とともに「このままでは製品価格がいくらになるのか考えたくもない」と漏らしている。強気なオファーの背景には、枠の削減やアジアの在庫不足などに加えて、先行指標となる夏サバの不振とアイスランド産が東欧の積極的な買い付けによって最高値を切り上げていったことも要因と考えられる。買い付け環境が一層厳しくなる中、例年以上に水揚げや価格動向に注目が集まるシーズンとなりそうだ。

（右欄上に続きます）

## 北米クロマグロに高値 豊洲７月輸入生鮮大物国産上品少なく引き合い

（8月21日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場における７月の生鮮大物売り場、輸入物の入荷本数は３３５４本で前年同月比１７％減少した。クロマグロは前年並みだったが、天然ミナミマグロとメバチはともに減少した。クロマグロ全体の本数は１５７本（前年同月は１５３本）と、ほぼ前年並み。大半が北米物で、カナダ産が４４本（同７３本）、ボストン産が１７本（同４２本）でともに減少した。カナダ産に次いで多かったのが韓国産で、巻網物を主体に３９本（同６本）、この他ニュージーランド（ＮＺ）産も３３本（同１８本）に増加した。オーストラリア産は１０本（同１１本）と横ばいで、養殖物のメキシコ産は１４本（同１本）と少量ながら増加した。北米物は例年通り、６月に漁期入りしていたが、「脂薄の赤身系ばかりで集荷を見送っていた」（輸入業者）ことから、初入荷が今月１４日と遅れたことで減少。同日の初荷は、競合する国内物が水温上昇などの影響で上品が少なかったことで注目され、１４１キロ物にキロ２万２０００円と際立った高値が付いた。初荷の高値を受けて、北米物は上品を主体とする入荷が継続し、カナダ産は平均値が９１７７円（前年同月８２３６円）、ボストン産は９５９２円（同８７０９円）と、ともに前年を上回った。なお、セリ値が公表される「合格ライン」は、ボストン、カナダともに５０００円前後とされるが、今季は例年に増して活発な買いが見られ、セリ残品など、相場未発表扱いとなったものは全体の２割程度と少なかった。ＮＺ産も身色の良い上品が評価され、高値は前年比３倍近い１万３５００円（同５０００円）、平均値も５３００円（同３６４０円）と高水準だった。

（次ページ左欄上に続きます）

**ミナミマグロの入荷ペース順調**　ミナミマグロは全体で３１８６本と前年同月比１６・９％減少。天然物のみで、豪州産は２１０１本（前年同月２７８５本）と約２５％減だった。同産は豊漁だった前年比で数を減らしたものの、月を通して順調なペースで入荷が続いた。一方、ＮＺ産は１０６４本（同９８１本）と約８％増加。同産は２０２１年を最後に入荷が停止していた現地業者による供給が再開したことも影響した。その他産地ではケープタウン産が２１本（同６７本）に減少した。　販売面について、豪州、ＮＺ産ともに国内マグロの上品不足や北米マグロの出遅れから、脂のりの良い上品は常時注目され、マグロの代替品として有力仲卸らにより買い競われた。　ただし、豪州産の上旬の魚は、歩留まりの悪い２０キロ台の小型が多かったため、販売は苦戦したが、下旬に近づくにつれ１００キロ近い大中型の出回りが増えたことで相場は緩やかに回復。高値はキロ９５００円（同１万３５００円）と前年には及ばなかったが、平均値は４３９２円（同３５７５円）で約８００円高だった。一方、ＮＺ産は高値が８５００円（同１万円）と前年を下回り平均値も３５３２円（同３５５５円）と前年並みだった。発表された数字上では豪州産に大きく水をあけられたＮＺ産だが、同産は２０００円台の安値圏で販売された赤身系並品のセリ値も発表しているため、実際の取引とは乖離（かいり）があったもよう。セリでは豪州産を上回る勢いで買われていた。天然ミナミマグロの集荷は毎年、米国との引き合い合戦になるが、今季は「セリの結果が良かったので、強気の集荷ができた」（卸会社）ことで、月を通して入荷は安定していた。メバチは全体で１１本（前年同月５０本）と７８％減少。豪州産が１０本（同３３本）と、ミナミマグロとの混獲物とみられるＮＺ産が１本（同入荷なし）のみだった。ケープタウン産は入荷なし（同１７本）。豪州産は赤身系主体ながら、国内物が極度の品薄だったことや、赤身商材として競合する豪州産天然ミナミマグロの良品不足もあり、セリでは高値キロ４８００円（同３５００円）、平均値も２１３０円（同１９８５円）で前年を上回った。（時事）

▽

（右欄上に続きます）

## ７月の訪日客過去最多
## 学校休暇で来日増　（8月21日みなと新聞）

日本政府観光局が２０日発表した７月の訪日外国人数（推計値）は、前年同月比４・４％増の３４３万７０００人となった。同月として過去最多だった２０２４年の３２９万２６０２人を大きく上回った。学校の休暇に合わせた来日が増え、中国や台湾、米国、フランスを中心とした訪日客が全体を押し上げた。一方、日本で地震が発生するとの情報がＳＮＳで拡散された香港や韓国からの旅行客は２桁減となった。

国・地域別で最も多かったのは中国で、２５・５％増の９７万４５００人。次いで韓国が１０・４％減の６７万８６００人、台湾が５・７％増の６０万４２００人、米国が１０・３％増の２７万７１００人と続いた。　このうち台湾は、航空便の新規就航や増便の効果もあり、訪日客数が単月としての過去最多を更新した。また、米国やフランス、インドネシアなどは７月として過去最多だった。一方で、香港は台風による航空便の欠航も影響し、３６・９％の大幅減だった。また、７月に海外に出国した日本人数（推計値）は前年同月比１４・９％増の１２０万５５００人となった。（時事）

## 【さかなの動き】道産イクラ 新漁前に高値警戒
## １万円台の昨年産引き合い　（8月21日みなと新聞）

北海道の秋サケ漁を前にイクラの高値への警戒が広がる。近年は水揚量５万トンを基準に市況が乱高下し、一部で差損を伴う販売があった。道秋サケ水揚量は２０１９～２２年に４万トン台後半が続き、２３年は７万９０００トンに回復。２４年５万３０００トン、２５年は過去最低の４万３６００トンとなった。この間、しょうゆイクラ市況（各年１２月の東京市場・キロ当たり。道漁連調べ）は、１９年５５００円▽２０年７８００円▽２１年９０００円▽２２年８７００円▽２３年６５００円

（次ページ左欄上に続きます）

▽２４年１万５００円で推移。昨年の道産しょうゆは１万３０００～１万１０００円中心で最高値を更新した。道漁連は、昨年の道産イクラ供給量（塩、しょうゆ、生冷）を前年比２２％減の１６２０トンと推定する。昨年はロシア、米国のマス不漁で冷凍卵輸入が低迷。道産を筆頭にサケ卵市況は高止まりし、新シーズンへの繰り越し在庫は８００トン。高値の道産を中心に一定のボリュームがある。　漁獲量３万トン台が想定される今期の不漁予測の後、昨年産の道産しょうゆは「１万２０００～１万１０００円程度で引き合いがある」（札幌市場卸）。漁期入り後の水揚げ、生鮮相場の動向が注視される。

## マグロ情報　三崎７月　冷凍メバチ
## 今年初の１０００円台　（8月22日水産経済新聞）

【三崎】三浦市三崎水産物地方卸売市場が公表した三崎魚市場における７月の冷凍メバチの平均単価は、キロ１０５６円で前年同月比１３・２％高、取引数量は３８４・２トンで４・７％減だった。一日当たりの平均上場本数は３０５本、１か月間の合計は６０９２本で４・２％減となった。６月の平均単価９７１円と比較すると８・８％高、取引数量は３２３・９トンから１８・６％増加した。１か月の上場本数も５２３９本から１６・３％増加した。三崎漁港への遠洋マグロはえ縄船入港数は１隻あった。

## 台湾大バチ９００円維持　インド洋一船買い
## 秋口まで搬入少ないか　（8月22日みなと新聞）

冷凍メバチ相場の指標となるインド洋台湾船一船買い相場は８月中旬現在、１本４０キロ上の大バチは先月と同じキロ９００円で推移する。大バチは６月に５０円高の８５０円となり、７月に入るとさらに上がった。１０月まで赤身商材の搬入が減ると予想され、東京・豊洲卸は「入札含めて大手の買いが強い。中小も高く買わざるを得ない状況」と説明する。大バチ以外の一船買い相場は、２５キロ上がキロ７５０円、１５キロ上が６５０円、１０キロ上が５５０円。キハダの一船買い相場は２５キロ上が７５０円、１５キロ上が６５０円、１０キロ上が５５０円で推移する。

（右欄上に続きます）

大バチ相場は昨年１２月末に８００円に上げて以降、約半年間保合いだった。国内在庫の消化も進み、６月に５０円上げた。卸によると、例年夏は赤身の搬入が減るため買いが強くなるタイミング。在庫の不足感も重なり、短期での上げとなったとみられる。台湾の減船も話題に上るが、削減の多くが停船していること、漁獲枠自体は変わらないことから、現時点の影響は未知数だ。商社は「燃油も高く、生産者の採算は厳しい。持続可能な産業の維持にはやむを得ない側面もある」と理解を求める。

## 冷凍カラスガレイ　内販１４００円続く
## 上旬 日本の買付低調　（8月22日みなと新聞）

８月上旬の冷凍カラスガレイの０・５～１キロドレスの内販価格（関西の商社出し値）は、前年同期比約１割高の１４００円と高値を維持している。商社筋は「原料の相場がかなり上がっており１５００円が見えてきているが、国内の売れ行きが悪く、内販価格はここ数カ月はあまり変わっていない」と説明する。商社筋によると、主要な消費国の中国や台湾からの引き合いが依然として強く、「浜値が上がり続けている状況もあり、日本各社の買い付けは低調」と嘆く。主な販売先の量販店の荷動きは夏場ということもあって伸び悩み、販売は引き続き低調と商社筋。今後については「これからも漁は続くが、中国の買い付けが意欲的な限りは高値が維持されるだろう」とみる。貿易統計によると、今年１～６月の冷凍カラスガレイ輸入量は前年同期比９％増の４７５３トン。輸入先はカナダの１７０６トンが最多で、ドイツ、ノルウェー、グリーンランドが続き、スペイン、ポルトガル、アイスランドからの輸入も目立った。

**組合事務所を商談ルームとして活用しませんか。6人収容できます。詳しくは組合事務所まで**

（次ページ左欄上に続きます）

## ７月食料消費者物価８.３%上昇
外食の寿司７％などコメ関連伸び率高（8月22日みなと新聞）

総務省が２２日発表した７月の全国消費者物価指数（２０２０年＝１００）は、価格変動の大きい生鮮食品を除く総合指数が１１１・６と、前年同月比３・１％上昇した。プラスは４７カ月連続。食料品の値上がりが続いているものの、エネルギーが１年４カ月ぶりに下落に転じたことで、全体の伸び率は２カ月連続で縮小した。エネルギーは０・３％のマイナス。燃料価格の下落により、電気代は０・７％、都市ガス代は０・９％、それぞれ下落した。前年に政府補助金の終了で価格が大きく上昇した反動も出た。生鮮食品を除く食料は８・３％上昇。前月の伸び（８・２％）をわずかに上回った。コメ類は９０・７％のプラスで高止まりしている。コメの関連品目はおにぎりが１８・９％、外食の寿司が７％、いずれも上昇した。早場米が出回り始めた２５年産米の価格の影響は、８月分の消費者物価指数から徐々に表れる見通し。　生活実感に近い生鮮食品を含む総合指数は３・１％、生鮮食品とエネルギーを除く総合指数は３・４％、それぞれ上昇した。（時事）

## 【さかなの動き】　ノルウェーサバ　７月対日単価３割高　今期減産でさらに上昇か（8月22日みなと新聞）

ノルウェー水産物審議会（ＮＳＣ）によると、７月の冷凍ラウンドサバの輸出高は前年同月比３４％減の５９５６トン、１５％減の１億８５００万ノルウェークローネだった。夏サバは日本市場が求める秋サバに比べて脂のりが薄く小ぶり。主に燻製用にアフリカ市場で需要が高く、上位輸出先国はナイジェリア、エジプト、オランダだった。うち最大市場の日本向けの７月サバ輸出量は２・３倍の３４０トン、輸出平均単価は２９％高のキロ２９・３５クローネ（約４２２円）と過去最高値の更新が続く。本格的に漁期入りする８月を前に、６～７月にロフォーテン諸島周辺でサバを漁獲するが、今年の漁獲量は８０００トンと過去４年間の１万２０００～１万４０００トンに比べ低調だった。今期の北東大西洋サバの漁獲量について国際海洋開発理事会（ＩＣＥＳ）は２０２４年９月、２５年勧告総枠を今期比２２％減の５７万６９５８トンと要求し、１０月の沿岸国会合で総枠に合意。ＮＳＣによると今漁期のノルウェーサバの漁獲枠は前漁期比２２％減の１６万５２９８トン。前漁期より減産が確定しており、相場はさらに上昇する可能性が高い。

## 流通３団体販売統計２５年７月　水産は１月ぶりに前年越え（8月25日水産経済新聞）

食品スーパー（ＳＭ）が主体の流通３団体が２１日に発表した「スーパーマーケット販売統計調査」２０２５年７月実績によると、総売上高は既存店前年同月比１０４・３％の１兆１０９０億２８８５万円となり、２９か月連続で前年同月を上回った。水産部門は９１７億１１４３万円（１０１・５％）で、１月以来、６か月ぶりの前年超え。相場高が続いて入荷が不安定になる中でも、マグロやサーモンなどの刺身類、海藻類などサラダ用商材の動きはよく、全体では前年並みとなった。「土用の丑」は一の丑が土曜日だったことで好調だった店舗が多いが、大型店との競合や、国産品の相場高による輸入品へのシフトで伸び悩んだ店舗もみられた。アジ・イワシは豊漁で好調な一方で、生ガツオは不漁で不調だったとの声が多く、魚卵や塩干も厳しい状況が続いた。食品合計は１兆１３７億７９４６万円（１０４・９％）、生鮮３部門合計は３５６１億５１０４万円（１０２・５％）。酷暑によりサラダ関連野菜が好調だった青果は１４４９億２２３０万円（１０２・７％）、バーベキューや焼き肉需要が伸長した畜産は１１９５億１７３２万円（１０３・１％）。「土用の丑」関連のウナギ弁当や丼物が好調だった惣菜は１２４１億２９８２万円（１０４・８％）だった。

（右欄上に続きます）

（次ページ左欄上に続きます）